2025 年 2 月 28 日開催

2024 年度 同志社大学人文科学研究所 第 21 期部門研究会 合同報告会

第 13 研究 移民・多文化共生・歴史認識の現在―植民地研究との融合に向けて

発表者：溝口 聡美（グローバル・スタディーズ研究科博士後期課程）

第 13 部門研究では、現代における差別・格差・暴力といった諸問題の起源が、植民地主義の歴史に起因することに着目し、とくに移民・多文化共生・歴史認識の 3 つのテーマに関し、社会学や政治学における研究と植民地に関する歴史学的研究を融合させ、世界中の諸事例を研究している。難民の問題化、「人種」ではなく宗教を理由にした差別、遺骨や文化財の旧植民地への返還要求などといった近年表面化した諸問題に関しても、現在と過去の対話を試みている。

本発表では、発表者が執筆中の博士論文に基づき、1942-1945 年の日本占領下の旧オランダ領東インド（現インドネシア共和国）で生まれ、戦後、旧宗主国オランダで生まれ育った「戦争の落とし子」について考察した。多くの子どもたちは幼少期に生物学上の父親の存在を知らされず、「インドネシア系オランダ人」として育ち、成人後に父方の生物学上のルーツを知った人々も多いが、戦後長らくオランダ社会において「敵」であった父方のルーツを公に語ることは容易ではなかった。現在もなお、生物学上の父を探す人々が存在し、戦争や植民地支配の影響が、個々人の人生に今なお及んでいることがわかる。近年、「日系オランダ人」という語が使われるようになったが、そこでは朝鮮半島・台湾出身の父親の存在や、インドネシアという占領された側の視点が見えにくい。本研究は、国家や帝国の枠を超えたトランスインペリアルな視点から、父親のルーツ（朝鮮半島、台湾の、特に高砂族）、母親の多様なルーツ（華僑、ユダヤ系、また、アンボン人やジャワ人といったインドネシア諸島内の様々なルーツ）にも着目し、先行研究で見過ごされてきた点を掘り下げることを目指す。また、子どもたちの父親探しが、個人のルーツ探しのみならず、戦争や植民地支配の記憶を社会がどのように受け止め、語り継いでいくのかという課題に新たな視点を加える可能性についても検討した。さらに、コンゴ民主共和国における少女兵の出産や、紛争下のウクライナやパレスチナで孤児となった子どもたちなど、現在も世界各地で「戦争の落とし子」が生まれている。そのような状況の中、「戦争の落とし子」の歴史的研究は、子どもたちや母親の福祉をどのように支えるべきかといった喫緊の課題にもつながっている。

第 13 部門研究では、このように、歴史学・社会学・政治学・トランスインペリアル・ヒストリーといった多様な学問領域を横断し、過去の歴史と現在の問題を結びつけながら、世界各地の事例を考察していく。